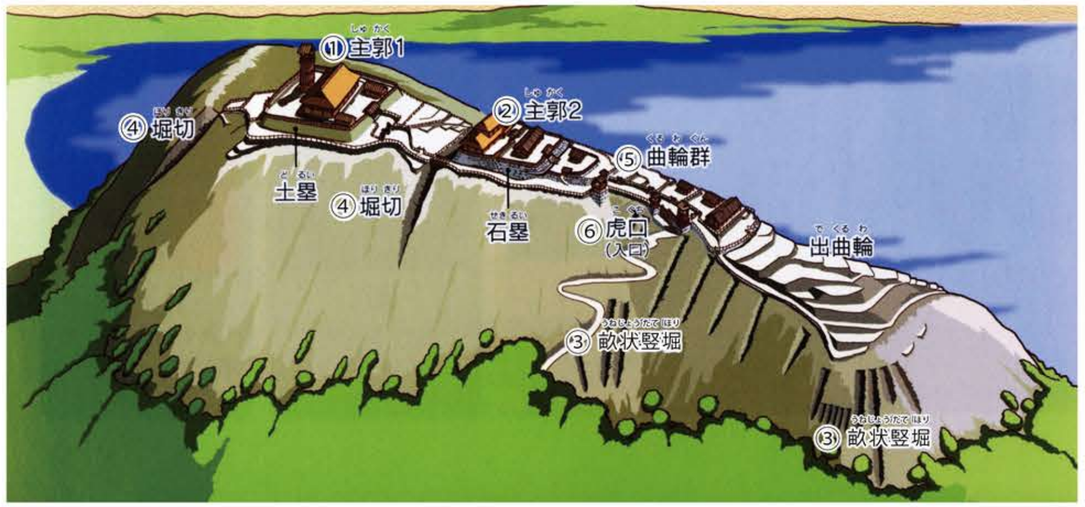
２５０年難攻不落の高崎城 ～中世の西大分地区～

高崎山の山頂（標高 628m）には、豊後国（現・大分県）を本拠地に最盛期には九州 6 国を支配した大友氏の山城「高崎城」がありました。地の利をいかし、大友氏のもてる築城技術の粋を集めて改修を重ねた「難攻不落」の城でした。

野津原から見た高崎山



高崎城復元想像図

歴史

南北朝の時代（1336~1392）、大友氏 8 代氏時（？ ~1368）によって築かれ、九州における北朝軍の拠点として百余度の戦いにも落城することなく耐え抜きました。戦国時代、大友宗麟の跡を継いだ 22 代義統は、天正 14 年（1586）に侵入してきた薩摩の島津氏による猛攻を受け、一時ここに立てこもっています。文禄 2 年（1593）、豊臣秀吉による大友氏の改易に伴い廃城となり、その 250 年の歴史に幕を閉じました。

高い防御性

高崎山は、府内のまちをはじめ、瀬戸内海を一望でき、別府湾に面する北側が断崖になった、攻めにくく守りやすい天然の要害でした。その山頂から尾根伝いに、曲輪を段階状に連ねた、全長 600m にわたる大規模な城郭が築かれました。高崎山には、山城のさまざまな「しかけ」の跡が今も残っています。

高崎城の主な「しかけ」

①②主郭：城の中心となる所。主郭が二つある構造は非常に珍しい。

③畝状竪堀：竪堀は、敵が登ってくる緩やかな斜面を縦に区切って掘り、敵の横移動を制限する。それを畝のように連続して並べることで、防御性をさらに高めた。

④堀切：尾根筋を深く掘って断ち切り、敵の侵攻を阻んだ。主郭 1 と 2 の間の堀切や、主郭 1 の東側にある深さ 25mの堀切が、主郭をしっかり守った。

⑤曲輪：斜面を削って平場をつくり、敵を待ちかまえて迎え撃った。現在確認できる曲輪の数は 20 以上にのぼる。

⑥虎口：城の入口。くい違った空間（桝）を内部に作って、侵入してくる敵をため、その勢いを削いだ。両側には大石を立てて並べ、堅牢性を高めるとともに大友氏の威信を誇示した。